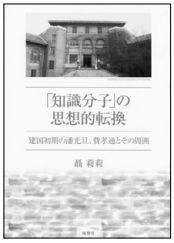
知識人の思想的転換を通してみる中国革命の光と影

西澤　治彦

聶莉莉著
「知識分子」の思想的転換
建国初期の潘光旦、費孝通とその周囲



A5判　412頁
風響社
［本体5000円＋税］

中国の社会主義革命は中国の政治経済や社会組織ばかりでなく、学問をも含む中国の伝統文化にも大きな変化をもたらした。中国を対象とする人類学的な研究においても、社会主義革命は一体、何をもたらしたのか、というのが一つの研究テーマとなっている。とりわけ、国外に留学した研究者は、中国社会を外から見る視点を持ち得るし、中国にはない学問研究の自由もあって、内省的な研究がなされつつある。なかでも、改革開放が始まった一九八〇年代に日本に留学した世代にとっては、自分史とも重なるため、そうした傾向が強い。

本書の著者である聶莉莉氏もそうした世代を代表する研究者である。本書は、建国初期に焦点をあて、潘光旦や費孝通らの社会学（当時は人類学との大きな差異はなかった）者を中心に、民国期の知識人らが共産党体制と出会い、どのようにして思想改造を余儀なくされ、本来の学問を放棄していったのか、その軌跡を丹念に追い、彼らの「思想的転換」を通して、中国革命が意味するものを問い直そうとするものである。

問題の所在と研究対象を明確にした第一章に続き、第二章では、建国初期の知識人らによる、マルクス主義政治理論の学習と思想的な転換の有り様が述べられている。第三章以降は、土地改革と知識人との関わりがテーマとなる。まず、第三章では、土地改革がどのように開始、拡大されていったのか、そしてそれに参加した知識人の思想がどのように変化していったのかが、さまざまな記録を駆使して、詳細に記述、分析されている。第四章では、清華大学を例として、土地改革工作隊がどのように組織され、知識人にはどのような葛藤があったのかを、潘光旦や沈従文らの日記などを史料として

論じている。第五章は知識人の中でも特に潘光旦に注目し、日記や手紙を丁寧に読み込むことによって、初期の段階で、潘光旦がどうして独自性を保ち得たのか、その遠因を探っている。そしてそれは彼の思想に民主と自由、個人と社会の関係性を中心に据えた成熟した社会観が存在していたからだとする。心の独自性を放棄しなかった点では沈従文も同じであり、沈の思想構造もあわせて論じられている。

第六章では土地改革に参加した潘光旦が表わした『蘇南土地改革訪問記』（一九五二）を巡って議論が展開されている。その意図は、この中で述べられている土地制度や階級、封建といった問題を、民国期の潘の言説と比較することによって、共産党思想への順応を読み取ることにある。合わせて、潘同様、農業経済学者の董時進を批判した他の研究者らの言説も、比較検討することにより、一個人の学問的一貫性の問題を超え、この変化を共産党の言説の浸透としてとらえている。

第七章は、蘇南における階級、土地制度と土地改革の実際がどうであったのか、費孝通が調査した呉江県や陳翰笙が調査した無錫などを例に、複雑な地権所有形態を明らかにし、土地改革で批判の対象とされた「地主」とはどのような人々であったのか、を論じる。そして階級区分が政治的な指標でもって区分けされたことの問題点を明らかにした上で、呉江県における階級闘争の不条理を指摘している。

終章の第八章は、一つの社会階層である知識人が、なぜ集団的に思想改造を受け入れたのか、彼ら自身と政治体制の両面から明らかにしている。そして最後に潘光旦と費孝通を例に、思想改造後の知識人の運命に触れ、思想改造をやり遂げたにもかかわらず、最後まで共産党政権に信頼されるような存在にはなれなかった理由を考察している。即ち、知識分子が忠誠を尽くそうとしたのは革命の思想と目標であって、共産党の組織や政権そのものではなかった。一方、共産党の側も、為政者に助言をするような士大夫的な知識人の態度を許すことはできなかった、というのがその理由であった。

社会主義革命以降、社会学を含む社会科学は否定され、その空白は長く改革開放まで続いた。従って、著者の世代にとっては、先人らの「思想的転換」を知るためにも、まず民国期の学問を熟知する必要があった。この過程は、「まえがき」でも述べられている通り、著者にとっても、世代間の断絶を埋める作業となった。その端緒となったのが、北京大学の院生時における、費孝通が書いた『郷土中国』（一九四七）の「再発見」であった。その時の感動は、「まえがき」に活き活きと描かれている。そこから著者の、半世紀もの空白を埋める

作業が始まっていく。そこに垣間見えるのは民国期の知識人群像であった。一読者として、改めて民国期の知識人の古典への精通、視野の広さ、柔軟な思考、学問的な良心などに感服せざるを得ない。思うに、「文」は知性の根源であり、その「文」を扱う学問こそが「文学」であり、「文」の世界を知る人間が「文人」と称されたのである。潘光旦や費孝通らは、社会学者である前に「文人」であった。

当時の知識人、とりわけ本書が対象としている「高級知識人」が直面した苦悩と、その後の人生を思うと、読んでいて重たい気持ちにならざるを得ない。費孝通は少数民族地区へ赴いていたため、土地改革には参加していなかったが、反右派闘争で右派と批判され、文革中も迫害を受けた。潘光旦は文革の最中、迫害の末に費孝通に看取られながら非業の死を遂げた。同じ中国研究者として、彼らに心からの敬意と深い同情を禁じ得ない。と同時に、我々外国人研究者が背負っているものと、彼らとではまるで重さが違うということを痛感する。それは、本書の著者が背負っているものについても言えることである。

本書でも、土地改革に多くの紙面が割かれているように、土地改革こそが、多くの知識人の思想改造の契機であり、核心的な出来事であった。土地改革の実際の状況については、日本でも、福地いま著『私は中国の地主だった』（岩波新書一九五四）や、秋山良照著『中国土地改革体験記』（中公新書一九七七）などによって紹介されてはいた。中国でも改革開放以降は、映画『芙蓉鎮』（謝晋監督　一九八七年）や『活着』（張芸謀監督　一九九四年）などでも、従来の教条主義的な観点とは決別し、民衆側の視点でもって描かれるようになってきていた。それでも、土地改革の実際の状況と、それに対峙した個々の知識人の対応は、外国人研究者には知る由もなかった。その意味でも本書は貴重な情報に満ちている。

土地改革にはそれなりの必然性もあったが、最大の問題はその方法にあった。もっとも、共産党の側からみれば、政権奪取後の土地改革は、革命根拠地での「土地革命」の延長線上の出来事であり、「やるかやられるか」という状況下では、細部まで目が行き届かないのもやむを得ない、となろう。それに土地改革は時期と地域によってその様相も大きく異なっていた。平穏に進められたところもあれば、最後まで残った広東のように激しい抵抗を受けたところもあった。先述の『中国土地改革体験記』の中で秋山良照は、工作隊の宿舎に深夜、銃弾が撃ち込まれるなど工作隊も命がけであった、と書いている。毛沢東の「革命不是請客吃飯」の言葉を引き合いに出すまでもなく、「革命とはそんなものだ」と言ってしまえば

それまでであるが、その代償は決して小さなものではなかった。知識人は居場所を失い、伝統文化は断絶を余儀なくされ、不条理な階級区分の弊害は文革後まで続いた。

著者による中国の土地制度の分析と、土地改革の具体的な手順やその問題点を読み進めていくと、土地改革にまつわる諸問題というのは、結局、中国ならではの広大な農村部の存在と、そこから起因する中国特有の都市―農村関係、及び多層的な社会階層が根底にあるのではないか、という思いがする。

また、土地改革を導いた理念としては、社会主義というよりもマルクス主義的な世界観の浸透ということができよう。こう考えると、土地改革を核とする中国革命は、民国期の西洋文化の流入の延長線上に起きた事件と言えなくもないし、さらに巨視的にみれば、西洋文明との対決という図式の中の出来事でもあった。思想的な大転換というのは、中国に限らず、明治期の日本や、大戦直後の日本でも、同じようなことが起っている。両国が同じような展開にならなかったのは、国土のスケールや歴史的な背景が異なっていた訳であるが、今後は社会構造の側面からの比較、検討も行われるべきであろう。

土地改革に対する疑問は、著者が大学院生の時、遼寧省の農村で調査を行ない、『劉堡』（東京大学出版会　一九九二）を執筆した時まで遡る。その時の疑問が、本書の萌芽となっており、その意味では、本書は『劉堡』の都市版、知識人版ともいえる。前著が民族誌であるのに対して、本書は思想史研究ではあるが、情緒的になることを極力押さえ、人類学者らしく詳細な事実を淡々と積み上げていくことによって、大きな問題を見事に描き出している。人類学者による思想史研究の試みというよりも、農村を熟知している人類学者だからこそ書けた、新しい思想史研究ともいえよう。視野の広さと柔軟な思考という点で、著者は本書の研究対象となっている民国期の知識人のよき伝統を引き継いでおり、中国知識人の良心と魂に触れる思いがする。

革命初期の共産党と知識人の問題が主題となってはいるが、本書には、今の中国がかかえる諸問題を解き明かす上で、根源的なものが凝縮されているように思える。例えば、知識人の思想改造では、清華大学が一つの舞台となっているが、共産党の前は、国民党によって部分的ではあるが管理されていた。日本でも政治による大学や学問への介入はあったにしても、党が大学を直接管理するということは考えられないことで、単に共産党の問題というよりも、政治と学問との深い

関係という点で、中国の社会システムの特徴なのではないか、と思わざるを得ない。この伝統は、大学内に存在する党組織として今日まで続いている。また、最後まで共産党政権に信用されることのなかった高級知識人の運命も、政治と学問の不可分の関係故に生じた「疎外」という点では、伝統的なシステムの枠内の出来事であったのかもしれない。但し、共産党政権下では、自ら集団から離脱することは許されなかった。この点が民国期までと大きく異なり、多くの悲劇の要因でもあった。それを避けるには、董時進の如く、中国を去るしかなかった。

土地改革はその実施において大きな問題があった。では一体、どこで間違えてしまったのか。それはマルクス主義の誤りなのか、それを指示した共産党の誤りなのか、それともそれを遂行した「人民」の側の問題なのか。その答えは、それらが合わさったものと考えるべきであろう。潘光旦は一九四一年に記した「青年の志と思想――他人に教わる」と題する随筆において、政治の教育への浸透に強い警戒感を述べる文脈の中で、「私は、我が民族は根本的に全体的に健全ではないところが多く存在する、と思っている。青年が民族の弱点をもたないことは期待できない。身教（身を以て手本とする）の欠乏という点で当代の教育は懺悔すべきである。」としている（二四二頁）。問題の根源は、マルクス主義の誤りという単純なものではないし、潘が自戒を込めて書いた如く、共産党の問題もそれを組織した「人民」に帰着するのではないだろうか。この問題は後の文化大革命の悲劇にも通底する。文革は毛沢東の権力奪還闘争として始まったとはいえ、その機に乗じて上にいる人間を引きずり下ろそうとする人々の私利私欲が、国中を大混乱に陥れてしまったといえる。このように考えると、著者が院生時代に「再発見」した費孝通の『郷土中国』は、潘の自戒に通じるものがあり、今日、改めて読み直されるべき重要な著作であるといえる。

著者はその費孝通の晩年の弟子にあたる。自らの恩師を研究の対象とすることに、戸惑いがなかった訳ではない。ましてや一部の人しか知り得なかった、費孝通の当初の素早い順応と反右派闘争以降の苦難の人生、そして生きるために民国期の研究を封印せざるを得なかった苦悩と晩年の懺悔などを、公にすることになるからだ。費孝通の弟子らからは、なぜ今更になって、という意見が出るかもしれない。著者も弟子としての「義」について自問しているが、本来の「義」は師を飾り立てることではなく、師の真実の姿を後世に残し、そして師の未完の仕事を継承することにあるはずであり、費孝通も本書の刊行を受け入れ、喜んでいることと思う。

共産党によって否定され、一旦は消された社会学・人類学であるが、今やその人類学者によって、しかも費孝通の最後の教え子によって、共産党が行った土地改革に歴史的な再検討がなされるというのは、何という歴史の巡り合わせであろうか。革命に身を投じた中国人と自ら思想改造に取り組んだ知識人、彼らに共通しているのは、中国を愛していたことだ。そして中国の未来に希望を持っていた。それが絶望に変わるのにそう時間はかからなかったとしても。同時に、本書の著者も日本にありながらも、祖国中国を限りなく愛しているということだ。本書の中国語版が大陸で出版されることは難しいであろうが、著者の祖国への愛は全ての中国人読者が読み取ることのできるものである。このような本を出版するには勇気が必要であるが、それを後押ししているのは、半世紀にわたる自らの「革命」体験で培われた揺るぎない信念と、この祖国への思いであろう。

著者の意図は、土地改革における共産党政権の失策を非難することにはない。あくまで人類学者として、さらに言えば中国の「文人」として、革命によって生じたさまざまな現実を客観的に認識し、誤りがあるならばそれを真摯に反省しようではないか、ということに尽きる。それは小さな一歩かもしれないが、やがて大きな潮流になっていくかもしれない。

（にしざわ・はるひこ　武蔵大学）

杉村博文教授退休記念

中国語学論文集

杉村博文教授退休記念
中国語学論文集刊行会

□新刊□

現代中国語研究、日中対照研究をテーマとする23編。杉村博文著作目録を付す。

刘丹青、沈阳・吴茜、原由起子、古川裕、任鹰、簡靖倫、西香織、徐雨菜、章天明、木村英樹、鈴木慶夏、橋本永貢子、島村典子、袁晓今、小野絵理、中田聡美、袁毓林・李强、杨凯荣、张恒悦、靳卫卫・段静宜、大西博子、葛婧、胡士雲（掲載順）　■8000円

宋代散文研究

楊慶存 著
後藤裕也・西川芳樹・和泉ひとみ・近本信代 訳

中国古典散文研究の理論に関する諸問題を整理した上で、宋代散文の独特な発展状況、および流派の伝承と普及について全面的に考察。また、宋代散文の発展過程における他の文化的要素との関連性、相互作用および社会的反応を複眼的に観察し、その発展の規則的な特徴について検討を加える。■5500円

白帝社　※価格は税別
〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp